〈一 冊 の 本〉

NHK「無縁社会プロジェクト」取材班　編著
『無縁社会――“無縁死”三万二千人の衝撃』

文藝春秋 2010年

1,333円（税別）

杉本　学

「無縁社会」という番組がNHKで放送されてから、およそ２年が経つ。この番組は大きな反響を呼び、さまざまな場で「無縁社会」という言葉を見聞きするようになった。本書は、同番組の取材スタッフたちが、取材の経緯や放送後の後日談をまとめたものである。

「無縁社会」とは同番組による造語で、血縁・地縁・「社縁」が失われ、孤独のうちに生き、死んでいく人びとが、高齢者を中心に増えている状況を表したものである。また、死後に遺体の引き取り手がないことを「無縁死」と呼んでおり、同番組の調べではその数が年間３万２千人に及ぶという。

番組では、無縁死した人の人生を、僅かな情報を手掛かりにして遡ったり、身寄りなく一人で暮らす高齢者に話を聞いたりして、その人がいかにして「縁」を失っていったかを丹念に明らかにしていった。本書では、そうした取材の過程が詳しく記されている。

また本書では、番組放送後の反響も取り上げられている。その一つとして、インターネット（掲示板やツイッター）での若い世代の反応について、一章を設けている。それによると、非正規雇用で独身の30代～40代の人びとが、番組「無縁社会」を視聴して、無縁死を「自分も将来そうなるかもしれない」と感じているという。

本書を貫く寂寥感に満ちた記述は、“つながりが希薄になった日本社会”の冷淡さを印象づけるに十分である。だが、読者の情緒に訴えて問題意識を喚起しようとするあまり、問題を客観的に捉える姿勢が甘くなってしまっているきらいがある。

本書で取り上げられているのは主に、いくつかの条件が重なってさまざまな社会的紐帯から切り離されてしまった人のケースであるが、本書はそれらを社会全体の“つながりの希薄さ”という一般論で語ろうとする傾向がみられる。特定の層の人びとへの支援なら、たとえばすでにいくつかの地域で始められているような、単身高齢者の孤独死を防ぐ取り組みなど、具体的な対処法が考えられよう。それに対し、問題を社会全般へと一般化したところで、いたずらに世の中を嘆いたり、復古的な論調を招いたりするだけに終わってしまうだろう。

とはいえ、本書や番組が重要な問題を世に投げかけていることに変わりはない。「無縁社会」がもはや流行語でなくなった今こそ、その問いをあらためて冷静に受け止める必要があるように思う。

（本研究所研究員　社会学）

発行所　熊本学園大学付属社会福祉研究所
〒862-8680　熊本市大江2－5－1　☎ 096－364－5161（内線1753）
発行人　所長　守弘仁志　　編集人　社会福祉研究所委員会
印刷所　コロニー印刷　☎ 096－353－1291

■古紙再生率100％の再生紙を利用しています。
■揮発性有機化合物発生の抑止と紙のリサイクル性に優れた「大豆インキ」を使用しています。